

ある女子中学生の体験発表から(発表原稿)

絵衣(仮名)さんが通室して約1年後、ある研究会で、自分の体験を発表する機会を得ました。

以下の文は、その時の発表原稿です。所々の母音が太い青文字になっているのもそのままです。

絵衣さんは、話し始めとして、A・Bのどちらから始めるのが良いか悩みました。それは、母音の発語が苦手だったからです。相談室での練習では、B「皆さん、おはよう……。」での練習でした。

でも、発表当日の出だしは、A「おはようございます。」でした。『吃音についての話をさせてもらうのに、吃音に負けてはいられない!』との気持ちだったそうです。

母音には、優しく、そして、仲良くかかわろう!

A おはようございます。

B 皆さん、おはようございます。

中学3年生の 〇〇〇〇 です。今日は、座って話をさせていただきます。よろしくお祈いします。

ここでこうやって話をさせていただくことになりましたのは、梅村先生から、この会で自分の吃音のことについて話をして欲しいと頼まれたからです。本当は、ここでするのがすごく嫌でした。でも、私は、来年高校生になります。高校では中学とは違い、義務教育ではなくなるので、色々な配慮をしなくてなくなります。当然、高校では教科書を読んだり、先生から急に当てられることがあります。ですから、高校で少しでも自信が持てるといいなと考えて、この場で話をすることを決めました。

吃音になりはじめたのが3才になる少し前のことでした。幼稚園に入園したころは自分に吃音があることに気づいていませんでした。声が出ないときは体を動かして話していて、ときどき話す内容を忘れるときがあったそうです。

自分の吃音に気づいたのは、小学2年生の少し前でした。話す時に呼吸がしづらくなり、最初の言葉が出てこなくなったのを気にしはじめました。そのころ、小学校の友達からは「話し方が変だ」と笑われたり、からかわれたりされてとてもいやでした。「なんでそんな話し方なの」と質問されたとき、どう

答えればよいかがとても困りました。なぜ自分はこんな話し方なのかと母に聞こうとしましたが、自分が聞くと母が困ると思い、ずっと相談することができませんでした。自分が周りの子供と違うということがいやで、このころ自分が病気やなんらかの障害なのかと思いはじめました。

小学校のことばの教室に通いはじめたのが、吃音に気づきはじめて小学2年生のことでした。両親は私の話し方を治してあげたくて、この教室に通わせたそうです。自分も「ことばの教室だからきっとなんらかの訓練をするのだ」とばかり思っていました。しかし実際にしたことは、紙飛行機を作ることやすぐろく、お絵描きやオセロなどのゲームばかりでした。そのころの私は、「自分は何のためにここに来ているのだろう」と不安になりました。ことばの教室に行っても話し方がよくなり、小学5年生のときにやめてしまいました。やめた理由は、このままやっても意味なく、授業を抜けて通級していたので勉強が遅れると考えたからです。ことばの教室の先生からは、本人が終わりにしたいと言うならそれでいいということだったそうです。本当は、ことばの教室の先生に自分の話し方について相談したかったのです。でも、先生はそういう話は全くしませんでした。そういう話をわざと避けていたのです。多分、吃音のことを自覚させないということだったと思います。でも私は、少しでもいいからちゃんと向き合って、話を聞いてほしかったなと、思っています。

中学に入学してからは環境が変わったこともあり、より吃りやすくなりました。そして違う学校の人からは、食べる度に笑われ、からかわれました。

吃音のことについては、これまでいやだったことがたくさんありました。例えば、私が、教科書を読んでいる時、吃って声が出なくて沈黙が続いていると、私が吃音だということを知らない先生は、私が漢字を読めないと思っているのか、漢字の読みを教えてください。それでも声が出ない私を見て先生は、しつこく読みを教えてください、大丈夫か？と心配したりします。私が吃音だということを知らないからしょうがないのですが、そういうことをされるとますます声が出なくなるのです。私が先生から言われて最も傷ついた言葉、それは、「何で読まないんですか。早く読んでください。」です。この言葉にショックを受けた私は、泣いてしまいました。それは、教科書を読めない私に対しての悔しさでした。その後私は、泣きながら先生に声を合わせて読みました。読んでいる途中で、「こんなものも読めねえのかよ。だっせえ！」、「話し方うける。」などという声、クスクス笑う声が聞こえました。

相手は自分に気を遣ってくれているのに、それを苦に感じてしまうこと。逆に相手に感謝の気持ちや謝罪の気持ちを伝えられず、相手を不快な気分させ

てしまうことがとてもつらいです。

中学2年になってすぐ、担任や教科担任の先生などに教科書を読んだり急に当てるということをお願いと頼みました。

自分は教科書を読んだり急にあてられることが毎日苦痛で、それが原因で学校を休みがちになっていたのも、学校に行くのが楽になったし、笑われることもなくなったのでよかったです。でも本当にそれでよいのだろうかとは思いました。その時は楽かもしれない。でも将来、社会で通用しないんじゃないだろうか。話し方は他人と違うけど、違うのはそこだけなのに特別扱いされてよいのだろうか。自分に甘えてよいのだろうかとは何度も考えました。でも、周りの人から嫌われるのが怖くて前に進めませんでした。

中学2年の夏から相談室で指導を受けはじめました。相談室では緊張したときのリラクセス法や、話すときの発語の仕方などたくさんのことを訓練してきました。先生に慣れてしまっているからかもしれませんが、相談室での訓練のときはリラクセスして話すことができるようになってきました。

梅村先生から北川さんという方が制作した「ただ、そばにいる」を紹介してもらいました。最初そのDVDが5時間もあると聞いて、長いなと思いましたが、結局1人ですべて見てしまいました。

最後に、DVDを見ての感想を述べて私の話を終わりたいと思います。

そのDVDを見ているとなぜだか涙が止まりませんでした。私の他にも吃音で悩んだり苦しんでいる人がたくさんいる。そんな人でも毎日を懸命に生きているということに気づかされた私は、「これからは吃音と上手につき合っていこう」と決心しました。

DVDの中で一番心に残った映像があります。それは、高校生の進路についてです。吃音がある高校生たちが自分の将来、仕事について話し合っていました。その話し合いでは、悩みが次々と出てきます。まず、“大学でみんなと馴染めるか”ということです。大学は、いろいろな場所からたくさんの人が通います。したがって自分のことを知らない人が大半です。だから、自分のことを馬鹿にする人は当然います。私も含めてみんな、それがいやなのです。もう一つは、“仕事がちゃんとできるか”ということです。DVDには『高校生がアルバイトをしてみる』という映像があります。アルバイトの練習の設定は、飲食店での接客です。吃音はいろいろなタイプがありますが、接客はとても大変です。例えば、「いらっしやいませ」の“い”が言えない。「アイスコーヒー」の“ア”の音が出ない。「お会計は580円でございます」の“お”と“ご”が言えない。もし練習で言えたとしても、お客様を目の前にすると吃

ってしまいます。他にも電話での接待や、会議での発言など、人と話す場面がほとんどと言ってよいでしょう。みんな普通に生活できるのかと不安なのです。そして、自分に吃音があるということを知られたくないのです。だから、私のように隠そうとします。けれど、そんな悩みを一人で抱え込まず、周りの人などに打ち明け、理解してもらうことで心は少し楽になるはずなのです。でも、それはとても難しいことです。中には悩みを馬鹿にする人もいるかもしれせん。

私が今、先生方にわかってほしいこと。それは、“悩みを聞いてほしい。そして理解してほしい”ということです。

世の中にはいろんな人がいます。そして、いろんな悩みを抱えています。私のように吃音がある人や、障害がある人もいます。そういう人は自分のことをからかわれると、心に大きな傷がつきます。だからみなさんには、「こういう人もいるんだ。」というように、理解し、そして認めてほしいです。

人は必ず悩みを抱えています。その悩みを、お互いに理解し合っていくことで、本当の友情が生まれるのだと私は思います。自分の弱い部分を見せ合える関係って、すごく素敵ではないでしょうか。

吃音と上手に付き合うというのは、どうすればよいのかを私は考えてみました。でもなかなか答えにたどりつきません。こうしている今も、考えています。でもやはり大事だと思うことは、“自分の吃音を受け入れる”ということだと思のです。私は最初、自分に吃音があるなんて信じたくありませんでした。他人と違うことがいやだったし、何より私たちの生活の中でかかせない話すとい行為が難しくなるなんて、思ってもみなかったので、自分がいやで仕方ありませんでした。みんなと同じように普通に話せるようになりたいと、ずっと思い続けています。でも、自分に吃音があることを認めることで、少しは楽になるのではないかと思います。自分の吃音を認めることは、簡単なことではありません。それはとても勇気がいることで、まだ私には難しいと思います。でも、自分の吃音を自分自身が受け入れることができれば、それは吃音と上手につき合うことに少し近づけるのではないかと、私は思うのです。

吃音はとても辛いです。しかしこれから、上手に吃音とつき合って、強い人間になりたいと思います。

これで話を終わります。聞いていただき、本当にありがとうございました。